

る。

中津に帰った田長は、医師として、コレラ流行（死者六七人）の医療活動を行ったり、絵筆、作詩、画賛をたのむ日常であった。

宮永村の「松瀬園」に田畑を耕し、半農半医の晩年をおくったと四男巧児は書いている。

村上田長は、明治初頭の激動期を医人としてのみならず、理想と現実につまずきながらも情念に燃えた志士として生きざるを得なかったひとりの医者 of 生涯を示してくれた。

(1) 川島整形外科病院 (2) 村上医家資料館

本邦に全身麻酔を伝えた 高嶺徳明の事蹟

松木明知

1

従来、日本における全身麻酔の鼻祖は、紀州の華岡青洲とされてきたが、昭和三十三年沖繩の歴史学者東恩納氏によって、琉球の高嶺徳明なる人物が、青洲を遡ること一五年も前に全身麻酔術を用い補唇の術を施行した事蹟が発掘された。

これによって高嶺の業績は、識者の注目を集め、沖繩出身の医史学者金城氏も高嶺について言及し、さらに沖繩の本土復帰に際して、沖繩の医学調査を施行した鹿兒島大の佐藤八郎教授も高嶺の業績の再認識を訴えた。しかし高嶺の主要な業績は、全身麻酔法であるにもかかわらず、専門の麻酔科学から観た研究はなかった。

以上のような事情で、著者は、昭和五十六年十一月に沖繩を訪ね、高嶺家の直系の子孫の方々に会い、種々調査した結果、従来知られていなかった二、三の知見を得た。

高嶺家に伝えられる『魏姓家譜』によれば、徳明は承応二年（清の順治十年、一六五三）に生まれ、童名を恩五良、字を徳名と称し、希賢と号した。

十歳の時紫金大夫と随って清の福州に赴き、三年間滞在し、この時中国語を学んだ。

帰国してからは、福州からの渡来人が形成した久米村（クニシダ村）の三十六姓の一つ「魏」姓を賜った。

徳明が清に渡ったのは、計六回であったが、第四回目の進貢時に黄会友から全身麻酔下の補唇術を学んだ。王孫尚益の欠唇を治療するため王命を受けて学んだのであった。元祿二年（一六八九）のことである。

琉球に帰ってから、尚益に手術する前に、五人の欠唇者の手術を行い、いずれも数日で完治し、十一月二十日尚益

の手術を行って成功した。

これを聞いた島津藩の奉行村尾源左衛門も、手術を見学したいと徳明に伝え、同藩の医師伊在敷道興を同席させて、各々秘伝書一卷を授けられた。

高嶺による手術の実証は合計七人である。

高嶺の全身麻酔の詳細については知られるところがない。しかし、著者の実地調査によって、(一)黄会友が秘伝をなかなか教授しなかったこと、(二)尚益の手術を二回行っていること、(三)尚益が術後口ヒゲを生じたこと、(四)高嶺家には、黄会友と盟約を誓った時の仏像が伝えられていることが新たに判明した。

高嶺が手術を行った当時、琉球にはケン、大麻が将来さされていたという記録もなく、したがって、高嶺の行った全身麻酔は、ケンか大麻によるという積極的根拠はない。むしろ、青洲と同じマンダラゲを用いた可能性の方が高いと

推察される。

山脇東洋およびその一門の解剖の地

宗 田 一

京都の官医・山脇一門による解剖については、『養寿院家譜』に次の五つが記録されている。

1、宝曆四_戌年（一七五四）二月、奉願於獄中解男子刑人屍觀臟、著臟志_并附録梓行、時五十歳（注：東洋）也、當時所司代酒井讚岐守忠用

2、宝曆八_寅年（一七五八）十月再於獄中解男子刑人屍觀臟、時五十四歳（注：東洋）也、當時所司代松平右京大夫輝高

3、明和八_{辛卯}年（一七七二）十二月昨年八月願通相濟候婦人觀臟於獄屋有之（注：東門）

4、安永四_{乙未}年（一七七五）八月 昨年願通相濟於獄屋婦人觀臟有之（注：東門）

5、安永五_{丙申}年（一七七六）三月 又於獄屋男子觀臟有